

茶の湯文化学会会報 No.76

第76号 / 2013年3月28日 千606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

酒井宗雅展を振り返って

橋 倫子

昨春秋、茶道資料館において「茶会記にみる茶道具―姫路藩主酒井宗雅の茶と交遊」が開催されました。私が酒井宗雅の史料について知ったのは、大学院に進学する少し前、今から十数年前のことでした。いつか本格的に研究してみたいと思い続けた史料と向き合い、担当の学芸員として、この展覧会に関われたことは、私にとって大変貴重な経験となりました。

開催期間中に茶の湯文化学会の近畿例会でも発表させていただきましたが、展覧会を終えて改めて感じたことがあります。それは、①先行研究の偉大さ、②展覧会という枠の中で、分析した内容を紹介することの難しさ、③酒井宗雅という人物の魅力、です。

この度の展覧会は、単に酒井家、あるいは宗雅旧蔵の茶道具を展示するという一般的な方法ではなく、展覧会タイトルにもある通り、茶会記をはじめ、日記、手紙等に宗雅が記した茶道具を文献史料と共に紹介するという企画でした。何故、そのような企画をしたかと言うと、酒井抱一の実兄、あるいは大名茶人・松平不昧の弟子としては名前が知られているものの、宗雅自身がどういう人物なのか、私自身、今一つはつきりしたイメージが湧かず、フィルターのかかったような

宗雅像をもっと明らかにしたいという思いが強かったからです。宗雅が所持した茶道具の内、現在よく知られているものの多く、点数で言うと二〇点にも及ぶ茶道具が、宗雅の没後に松平不昧の所蔵となり、『古今名物類聚』を飾っています。そのため、所蔵した茶道具からの分析だけではどうしても不味像と大きく重なってしまうのです。私だけではなく、一般の入館者にしても、果たして茶道具と向き合っただけで人物像まで理解できるのだろうか。そのような疑問の中で、文献史料を併用する方法を選びました。

大名茶人としての酒井宗雅の研究は、栗田添星氏による史料の収集、ならびに一連の研究に多くを負っています。栗田氏が長年掛けて収集し、研究した史料、



宗雅展リーフレット

とくに宗雅の茶会記『逾好日記』の翻刻、解説(『酒井宗雅茶会記』村松書館、一九七五年)は、世に酒井宗雅を知らしめた重要な研究であり、過去に行われた根津美術館、姫路文学館等での展覧会でも栗田氏の研究成果が広く取り入れられてきました。

その一方で、日次記にあたる『玄武日記』については、十五年にわたる膨大な量の日記であり、早くからその存在が知られていたものの、翻刻には誰も着手出来ずにいたのです。それを、関西学院大学文学部の加地宏江先生(現名誉教授)と、その指導生達(同大学中世文書研究会)が十八年もの歳月をかけて翻刻を行い、近年漸く完了しました(姫路市立城郭研究室『城郭研究室年報』第二二—二〇号所収)。その作業は、一人の研究者が単独で行えるような量ではなく、多くの方々の力の結集が偉大な成果へとつながったものです。

今回、この膨大な量の『玄武日記』の中から、茶の湯に関わる部分を抜き出す作業を行いました(茶道資料館編 平成二四年秋季特別展図録『一茶会記にみる茶道具―姫路藩主酒井宗雅の茶と交遊』一〇八—一二三頁)。日記の中に茶の湯に関わる内容が散見され、これまで引用されてきた部分もありますが、日

記全体を対象とした分析は恐らくこれが初めてでしょう。残念ながら個々の事項を深く掘り下げるには至らず、今後の課題として残りましたが、この日記の中に茶の湯に関わる記載がどれだけ多く認められるのか、その概要とおよその傾向を示すことが出来たのではないかと思います。また、茶人・酒井宗雅を知るためには『逾好日記』の分析のみでは決ま

十分ではないことも明らかになったと思います(近畿例会の発表要旨をご参照ください)。しかし、展覧会という枠の中で、分析した内容を十分活用して紹介することの難しさも同時に感じました。準備期間の二年間、毎日コツコツと解説をする中で、小さな発見、小さな驚きを色々と体験してきました。私には、どれも大切な発見であり、何とか展覧会に盛り込みたいと思うものの、美術館である以上、展示の主役はあくまで茶道具であり、結果として紹介できなかった史料が多かったのも事実です。図録の中に論文として挿入し、関連事項として表を添え、それでも調べてきたことの半分ぐらいは日の目を見ず、歯がゆい思いも残りました。今回、残念ながら紹介できなかった事柄は、頭の引き出しに入れて、いつでも引き出せるように準備しておき、別の

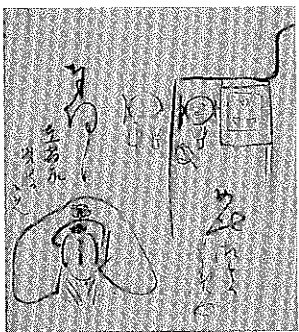
方法で公開できたらと思います。

最後になりましたが、茶会記、日記、書簡のいずれからも、宗雅の等身大の姿が生き生きと感じられました。また、宗雅の感性の豊かさ、何かお茶目な魅力、そのようなものに強く引き付けられました。

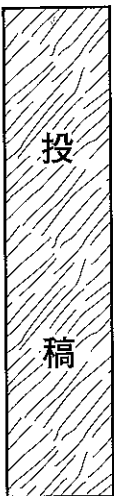
例えば、茶会記の『逾好日記』には、単に茶道具の名称や懐石の内容だけではなく、気にかかった茶道具の絵や茶室の間取り図などが添えられています。短時間でさらさらと描いたラフ画ですが、心躍らせながら筆を走らせた宗雅の姿が目には浮かびます。その一例として、天明八年七月一日の自会記を紹介しておきます。宗雅所蔵の釣花入「松本船」(現泉屋博古館分館蔵)の所望があり、宗雅は所望に応えるために朝茶事を開きました。後入りの際に、宗雅は「松本船」に瑠璃色の朝顔を一輪、工夫を凝らして入れていきます。その花の活け方を客人に称賛された宗雅は、一輪の朝顔を活けた「松本船」の絵を日記に描き添えています。

また、茶道の師であった不昧との往復書簡では、点前や茶道具、茶室に関する質問を、詳細な図を添えながら記していますが、その内の一通には、文末に、御教示よろしくお願

いしますと、ぺこりと頭を下げた自画像が描かれています。何とも茶目つ気たつぷりな宗雅の人物が感じられる絵です。



大名茶人としての酒井宗雅の知名度はまだまだ高いとは言えません。今回の展覧会を通して、そしてこの文章を通して、少しでも多くの方がその名前を知って下されば幸いです。



『入唐求法巡礼行記』に見る茶の風景

沢村信一

『入唐求法巡礼行記』は、最後の遣唐使として唐へ渡った円仁(七九四—八六四年)が十年におよぶ在唐中に書いた日記である。『入

唐求法巡礼行記』には多くの先行研究がある。

このうち茶に関しては石田雅彦氏の『茶の湯』前史の研究(雄山閣)があり、これは異なる観点から見たい。この時期は、日中両国における茶の発展期であるが資料が豊富とはいえず、茶がどのように飲まれていたかなどがよく解っていない。一般に知られているものとして唐代に陸羽の著した『茶経』があり、現在でも茶に関する聖典と言われ、栽培から製茶、飲用方法や効能まで幅広く記載されている。さらに茶経が書かれてから約百年後の八七四年に封印された中国陝西省の法門寺地下宮から出土した茶道具類をみると、茶経に書かれていたものが実際に使われていたことがわかる。我が国においても、最澄が自分のもとを去った弟子泰範に戻るようにと送った手紙(八一三年)に茶十斤を送ったことが書かれ、僧永忠が嵯峨天皇行幸の折り梵釈寺で茶を献じた(八一五年)ことが『日本後記』に書かれているのが、茶に関する記載の最初であり、この頃日本でも茶が飲用され始めたと考えられている。

今回、『入唐求法巡礼行記』から茶に関する記載を抜き出し、内容について考察した。使用したのは、『入唐求法巡礼行記』(深谷

憲一訳、中公文庫)であり、これは現代語訳と原文が併記されている。また、現代語訳の内容確認は『入唐求法巡礼行記』東洋文庫、原文の確認は「天台電子佛典(CD三)」(天台宗典編纂所)の『入唐求法巡礼行記』を用いた。また、前掲『茶の湯』前史の研究にも参考にした。

本文中より茶に関する記載として三十三箇所が検出された(表参照)。「入唐求法巡礼行記」は四巻からなっており、第一巻には六箇所、第二巻には最も多い一五箇所、第三巻には八箇所、最後の第四巻には四箇所の茶に関する記載があった。また年代別では、八三八年に二箇所、八三九年に五箇所、八四〇年には二〇箇所、八四一年は一箇所、八四三年に一箇所、八四五年に四箇所であった。

これらの茶に関する記載を、一、飲用形態別や茶の品質、二、喫茶の場面、場所、機会など、三、供物や贈り物としての茶などに別けて考察した。

一、出現頻度の高い言葉は「喫茶」であり全三十三箇所中、一四箇所の記載がある。これに対して、同じような意味であるが「啜茶」が五箇所書かれている。

また、「細茶」が二回(表番号4,5)出て

くる。深谷氏は「新茶の上等」あるいは「新芽の上等の茶」としている。現代では、「新茶」は香気良好で、新鮮味があり、一般的に受容されている。また、鎌倉時代後期の金沢文庫古文書でも、新茶を貴重なものとして扱っている。茶経においても、茶の摘採時期として「二月三月四月の頃」となっており、茶を新芽で摘採している。国内では、近世になって碾茶を夏の間山間地で保管し、晩秋に口切りの茶として用いることが茶の湯の重要な行事となつていく。明治時代以降の機械化される以前の製茶技術では、現在より水分含有量が多く、夏期の高温によって、茶の品質が低下していたため、このような対策がとられたのである。現在では、製茶の機械化が進歩し、さらに乾燥や冷蔵技術が発展したことで、新茶のもつ清々しい香気を長い間保つことができるようになり、技術的には口切りは不要となった。このような理由から、新茶がもてはやされるのであるが、円仁の時代の新茶はどのようなものであったのであろう。

二、飲用場面について、一、役人や僧侶との会談時の飲料として、二、宿舎で宿の主人が入れてくれたものとして、三、旅の途中で食事や休憩時における飲料としての飲み方が

記載されている。寺はもとより、役所や旅の途中で泊まった時の宿など、いたるところで茶の飲用があり、茶が一般に普及していることがわかる。最初に上陸した揚州はもとより、五台山、都である長安においても、茶が一般的に飲用されている。また、来客時に茶を入れることは「もてなし」を表していると考えられ、現代と共通点として興味深い。そのほかに、「茶店」や「田舎茶店（土店）」（表1、31）の記載があり、茶を飲料として提供している店があったことがわかる。九世紀中頃の中国においては、このように茶がいろいろなど飲用できる程度に広まっていたことがわかり、同じ時期の日本の事情とは異なるようだ。国内に茶が入った当初は僧侶の修行時の眠気覚ましとして飲まれていたと言われているが、当時の中国では、そのような飲用方法ではなく、現代と変わらない一般的な茶の飲用方法であったことがわかる。

三、贈答や供物としての茶に関しては、一、餞別を含めて贈答としての茶六件（表4、5、9、14、30（30は二件として数える））、寺への供物としての茶二件（表19、24）、そして物々交換に用いる茶一件（表12）が出てくる。これらのことは、当時、布や香と同じように茶は高級なものであり供物とされていたことがわかる。また、旅の途中で茶を醤油や野菜と交換しており、そのような対象として受け入れられていたと考えられる。

その他、長安に約五年間留まっていたが、その間の茶に関する記述は少ない。これは長安滞在中に「会昌の廢仏」が起こり、茶を記述するどころではなかったと推測する。長安からの出発時に贈られた「団茶」「蒙頂茶」（表30に三件）は、五年間の滞在中に茶に関する知識が増えることで、これまでの「茶」ではなく産地（蒙頂茶）や種類（団茶）として書かれたと考えられる。ここにある蒙頂茶は、はたして団茶であるのか、葉茶であるか興味深い。団茶と書かれているのは、産地を限定しない茶として記載され、特別な産地を蒙頂茶と記載したのか疑問が残る。

表33に、「塩茶をかけた粟飯をよく食べていた」とあり、村人の食事の粗末さを記載しているが、これまでの内容からは、茶自体が高級な飲み物という印象があり、粗末や粟飯と茶の対比が、それほどまでに茶が普及していたのか興味深いところである。

ここで石田氏のまとめたものを振り返ってみると三十二件の記述であり、「塩茶をかけた粟飯をよく食べていた」（表33）が抜けている。また誤植と思われるが表2、30に該当する日時の記載が違っているようである。

このように「入唐求法巡礼行記」は、中国および日本での茶の発展期に書かれたものであり、当時の中国の茶に関する様子を日本人の目でみて書かれているために、興味深いものである。

参考資料

- ・「茶の湯」前史の研究、石田雅彦、雄山閣、二〇〇三
- ・入唐求法巡礼行記、円仁、深谷憲一訳、中央公論社、一九九〇
- ・入唐求法巡礼行記（天台電子佛典CD三）、天台宗典編纂所、二〇〇七
- ・入唐求法巡礼行記、塩入良道、東洋文庫、一五七（一九七〇）、四四二（一九八五）



平成二十四年度第三回理事会が、十二月八日（土）午後二時から、池坊短期大学第二会議室で行われた。理事十三名が出席し、以下

年	月	ページ	現代語訳	原文	相手	状況	場所
1	7月20日	39	知茶の茶葉に驚き、しばらく停まって休んだ。	劉知茶葉店暫休			揚州、開元寺
2	11月18日	84	・揚州の役人たちが椅子に腰をおろして、お茶を飲んでいる。 ・揚州の僧侶が椅子に座ってお茶を飲んでいる。	・揚州の上院茶 ・揚州の僧侶茶	揚州の役人	日本についての質問に答える	揚州、開元寺
3	開元3年	120	諸寺の長老を招いて茶を飲んだ。	諸寺長老僧徒茶室茶	諸寺の長老	我がの食事會	揚州、開元寺
4	3月	145	擧げに僧正をやつて擧げ、合わせて新芽の上等の茶を飲んだ。	擧げ僧正劉開元寺茶	僧家擧げ	新茶を語る	揚州、開元寺
5	3月23日	150	劉開元寺僧徒十斤茶を飲んだ。	劉開元寺僧徒十斤茶	新撰人の過師劉開元	新茶を語らせた	揚州、開元寺
6	4月7日	168	・寺の僧侶は茶をたて出して飲んだ。 ・茶をすてて後、僧の後院に向かった。	・寺の僧侶 ・僧茶之後院向良家去	寺の住僧		宿城村
7	6月8日	215	三十余人の僧侶がいて食見しお茶をいたした。	諸僧等并有食看僧茶	寺の僧三十人	香で僧徒と茶を飲む	赤岩
8	3月3日	292	長官は菴屋室内に忍入りて茶を飲むに付て。	使僧菴上斤菴茶	僧の長官		揚州
9	3月4日	292	長官・劉開元は寺の菴屋で茶を飲む。その場に円仁も呼ばれて円仁にお茶を飲んだ。	菴屋茶、菴屋法僧茶	僧の長官	圓の息目、長官によれば日本について質問があった	揚州
10	3月13日	309	采夫館に着き、茶を飲んだ。	劉采夫館茶	道中一行	休憩時の飲茶	揚州一五台山（采夫館）
11	3月14日	309	菴村の王家に着いて、お茶を飲んだ。	劉菴村王家茶	道中一行	休憩時の飲茶	揚州一五台山（菴村）
12	3月17日	312	持参の茶一斤を出して、鹽油と野菜を買ったことができた。	持参茶一斤買得鹽油	菴村の菴屋の主人との応答	茶で鹽油と野菜を買ったが、食べられるものもなかった	揚州一五台山（菴村）
13	3月23日	317	湯茶、茶の接待には、十分満足した。	湯茶菴茶茶茶	事務官	事務官の招待	揚州一五台山（菴村）
14	4月1日	325	・菴村の僧侶は茶をたて出して飲んだ。 ・菴村の僧侶は茶をたて出して飲んだ。	・菴村の僧侶茶 ・菴村の僧侶茶	長官	旅行証明書の交付	揚州一五台山（菴村）
15	4月2日	326	菴村は菴屋室内に忍入りて茶を飲むに付て、食べさせてくれた。茶をすてて菴外に飲んだ。	菴外菴屋室内忍入り茶	菴屋の僧侶	事務所で別のぬいまつ	揚州一五台山（菴村）
16	4月5日	329	不村の史家で茶を飲んだ。	不村史家茶	道中一行	休憩時の飲茶	揚州一五台山（菴村）
17	4月6日	330	菴屋の菴屋に着き、茶を飲んだ。	劉菴屋菴屋茶	道中一行	休憩時の飲茶	揚州一五台山（菴屋）
18	4月22日	345	女の人が菴屋に出てきて客問い物度めいたわりのことをかけてくれた。菴屋が暑くて、茶を飲んだ。	婦人出来菴客問度菴茶	道中一行、劉主人・婦人	休憩時の飲茶	揚州一五台山（菴屋、菴村）
19	5月5日	360	菴屋や灯明、すばい客、茶や粟や食事を擧げて賢人聖人を供養し起している。	菴屋茶香茶菴食供養賢聖	菴屋の僧侶、大衆の僧	五台山での供養	五台山、劉菴屋（竹林寺六院の一つ）
20	5月16日	366	茶を飲んだあと涅槃堂に行つて私の涅槃の像を礼拝した。	菴茶之後入涅槃堂禮拜涅槃像	志遠和上	五台山涅槃堂	五台山、涅槃堂
21	5月20日	381	王子寺に着きここで茶を飲んだ。	劉王子寺茶	道中一行	五台山巡礼	五台山、王子寺
22	5月21日	388	中菴の菴屋に着きここで茶を飲んだ。	劉中菴菴屋茶	道中一行	五台山巡礼	五台山、菴屋寺
23	5月29日	393	菴の菴屋に供養飯が有りて茶を飲んだ。	菴菴屋供養飯入菴茶	道中一行	五台山巡礼	五台山、供養飯
24	6月6日	398	菴屋茶室は五台山から同行者となって一様にここまで来たが、ずっとかゆ飯茶の調子もみていてお茶の味もかかっていた。	菴屋茶室五台山同行者茶	劉使、大衆の僧	供養の食事會	五台山
25	7月1日	402	菴の僧が茶をたて出して飲んだ。	菴僧茶菴日本菴菴仙二菴僧茶	菴屋の僧	長安へ行く準備	五台山、菴屋寺
26	7月13日	428	菴屋は五台山から同行者となって一様にここまで来たが、ずっとかゆ飯茶の調子もみていてお茶の味もかかっていた。	菴屋茶室五台山同行者茶	菴屋の僧	長安への道中	太原府
27	8月2日	439	菴屋の菴屋に着きここで茶を飲んだ。	菴屋茶室五台山同行者茶	菴屋の僧	長安への道中	長安
28	8月1日	476	菴屋の菴屋に着きここで茶を飲んだ。	菴屋茶室五台山同行者茶	菴屋の僧	長安への道中	長安
29	1月28日	517	お茶のあと、伏士菴屋に着きここで茶を飲んだ。	伏士菴屋茶	菴屋の僧	長安への道中	長安
30	5月15日	578 579 580	・菴茶一葉をたて出した。 ・菴茶一葉をたて出した。 ・菴茶一葉をたて出した。	・菴茶一葉 ・菴茶一葉 ・菴茶一葉	菴屋の僧	長安へ行く準備	長安（出衆）
31	6月9日	587	私たちに逢いついて菴屋茶室に入つて茶を飲み、長い間話しかけてくれた。	菴屋茶室五台山同行者茶	菴屋の僧	長安から出衆	揚州
32	7月9日	599	菴の菴屋は菴屋を見て菴の菴に思ひ、菴の菴を呼んで言いつけてお茶や食事をたて出して飲んだ。	菴菴屋菴屋茶	菴屋の僧	長安から出衆	涇水県
33	6月16日	606	山村の果人は食べ物がなくて粗末で、菴茶をたて出して飲んだ。	山村果人菴茶	菴屋の僧	揚州への道中	揚州

の議題について討議がなされた。

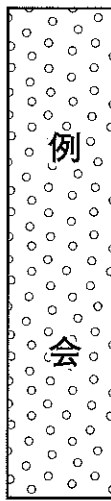
- 一、各例会等（会誌・会報含む）の報告
- 二、平成二十五年総会・大会について
- 三、次期会長候補者について
- 四、その他

まず、第一号議題で、各事業が順調に実施されている旨の報告があったあと、第二号議題では、平成二十五年大会企画担当の吉井理事が急きよ欠席となったため、谷会長が企画資料を読み上げる形で提案がなされた。すなわち、金沢市（第二回理事会で承認済み）において六月八日（土）・九日（日）を開催日とし、八日は学会二十周年記念行事として記念茶会を終日行ない、九日には、研究発表・記念講演・シンポジウムおよび総会を行なうものとする。また、記念茶会は金沢市立中村記念美術館茶室耕雲庵および旧中村邸で、総会・研究発表・記念講演は石川県教育会館ホールで行ない、記念講演は、「茶の湯研究の過去・現在・未来」をテーマに、歴代会長（中村昌生氏・倉澤洋氏・谷晃氏）によるシンポジウムをお願いするというものである。細部に因していくつかの検討事項が出されたが、おおむね承認された。

第三号議題では、会長候補者選考委員会

員から、次期会長候補者として熊倉功夫理事が推薦された。推薦理由として、本学会発足時から呼びかけ人として関わってこられたという旨、併せて報告があり、異論なく全会一致で承認された。

「四、その他」では、会誌の投稿論文についての査読制度についての諸問題、本学会の論文検案に関する諸問題、会誌の編集担当者数の問題などが意見として出、これらについての解決に向けた指針を、次回理事会までにとめてほしい旨、谷会長から要請があった。



東京例会

（平成二十四年十一月十七日）

「天下二宗四郎」、その後」

鈴木裕子

「天下二宗四郎」は土風炉にみられる印銘であるが、筆者は二〇〇八年に江戸市中の遺跡から出土したこの印銘の土器を紹介した。その後出土資料や伝世品の情報が寄せられ、文献史料もさらに加えて再検討した。その結

果以下の五点を提示する。

- ①生産年代は十七世紀と十九世紀に集中する。間の十八世紀にはみられない。
- ②器種は土風炉が最も多いが、香合・蓋置・前かわらけ等の茶道具しかみられない。
- ③出土資料からみると、胎土は江戸の在地の土である。これは十九世紀初めの文献史料にもある「今は江戸住居故」と一致する。ただあまりにも出土例・伝世品が少ないので、普段は土器を生産していた、茶道具だけに押印したのではないかと考えられる。また十九世紀前半の記年銘の伝世品の箱書に「御風呂師 松木宗四郎」とあり、これが本名である可能性が高い。
- ④刻印は大印二・小印一の計三種類。字体は大きく二分され、大印一種と大印・小印一種の組み合わせに分けられる。
- ⑤系譜は十九世紀初めの文献に初出。この時点で永楽善五郎家と天下二宗四郎は並んで表記される。天下二宗四郎は系図と共にブランド化が図られた可能性がある。

茶道具の中には十七世紀に評価されたものが十九世紀前半に再評価されるものがあるが、天下二宗四郎はその典型的な事例として考えられるのではないか。

（平成二十五年一月十九日）
「江戸時代の女性の茶の湯」

——往來物・女訓物を中心に——

谷村玲子

本発表では、十七世紀から十九世紀にかけて版行された女性向往來物と女訓物の中から、茶の湯に関する記述を抽出し、時系列順に検証を行った。

十七世紀に恵まれた女性にとって茶道具は身近なものであったが、手習、香、歌、琴、琵琶を行うことは奨励されても、茶の湯を薦める記述は「女重宝記」の「女中たしなみてよき芸」に「茶のゆする事」と一言あるだけである。十八世紀前半になると、女性が「薄茶点前」を一通り習得することは、その立ち居振る舞いまでもしとやかに見えると肯定する本が複数現れる。ただし濃茶は女性からは遠い存在であったようだ。十八世紀後半の「この道を知る人につたへ習ふべし」との記述からは、初心者女性に稽古を付ける女性がいなかったことがわかる。ただし様々な本から、女性の茶の湯は夫の許容範囲に留めるべきものであり、濃茶点前は女性の「嗜み」としての茶の湯を超えるものであった。ところが十九世

紀に入ると、「茶の道はあまねく流行し」「人との交わり」に必要な礼と見なされるようになる。女性の間でも炉開きの茶会を催し、当時の錦絵は点前をする女性を風情ある姿として描いている。また女性でも流派を話題にする者もでるようになる。しかし女性の茶の湯は、嗜みや社交として「しとやかさ」を追求するものであって、思想性や理想を求めるものにはならなかった。

静岡例会

（平成二十四年十一月二十五日）

「文人たちと煎茶」

船富富美子

文人趣味の煎茶と文人との関わりを知る主たる手掛かりは、煎茶の場で制作された漢詩文や書画作品、使用された喫茶道具である。

漢詩文の例として第一に挙げられるのは、隠元隆琦ら唐和僧による「雪中煮茶詩卷」（一六七二年）であろう。喫茶道具の例としては、十八世紀前半に活躍した売茶翁所持とされるものが伝えられている。十八世紀後半、煎茶は文人の嗜みの一つとなる。木村兼葎堂の伝記（上田秋成著『あしかひのこと葉』）には、兼葎堂が龍井茶と手製の中国風菓子と

共に舶来の書籍や貝の標本などで客をもてなしたことが記されている。『七石翁遺愛品展覧図録』収載「兼葎堂旧藏錫版子張茶壺」には「戊午（一七九八年）春沈敬瞻贈 龍井茶」という兼葎堂の手による張紙がある。沈敬瞻は唐商船の船主で、積荷には書籍も含まれていたことから、兼葎堂が顧客であったことが推測される。十九世紀前半、詩書画を身につけた文人にとって、煎茶を含む文人趣味は生活の一部となっており、一般にも流行した。折本仕立「雪月花鵬」には文人たちの漢詩や画が収められている。詩文によれば、篠崎小竹、小石元瑞らは天保四年（一八三三）二月末日嵐山に一泊して花見を楽しみ、更に翌日品茶を行ったという。究理堂文庫蔵卷子本「品茶記」によつて補えば、三月一日は元瑞宅で酒宴、翌二日は雨のため自宅で品茶を行うことになった。このような資料によつて文人たちと煎茶の関わり的一端が明らかになると考えられる。

「中世静岡の喫茶文化」

橋本素子

本報告では、静岡県における中世後期の喫茶文化の受容状況を、生産・流通・消費にわたり史料に則して検討した。

まず生産であるが、『異制庭訓往来』に「駿

河清見」がみえるように、南北朝時代から確認できる。茶園の形態は、寺社境内茶園、国人・土豪の屋敷茶園が確認できる。場所も伊豆・駿河・遠江の県内全域の平地・山地にわたる。

次に流通であるが、茶の売買を示す直接的な史料には恵まれないものの、茶に税が懸けられていたことから、市場での茶の換金と流通の可能性について言及した。また茶の贈答の史料の背景に存在する、寺社における茶の生産・集散拠点としての役割を示した。

最後に消費である。今川家を中心とした武家儀礼の饗応において、茶を使用したことを確認した。また寺家から武家への儀礼において、茶の贈与がおこなわれていたが、そこには関東公方の儀礼の影響がみられる。喫茶文化の一般化を示す史料にも恵まれ、南北朝時代以後の茶屋での受容や葬祭儀礼を通じての受容、さらには一六世紀前半の「日常茶飯事」の到来を示す史料が確認できる。

以上のように中世後期の静岡の喫茶文化は、生産・流通・消費ともに、地方における受容の極めてスタンダードなありかたを示しているものと評価できよう。

東海例会

(平成二十四年十一月二十四日)

「徳川美術館所蔵の白天目の再現をめざして」

青山双男

徳川美術館所蔵の白天目は、武野招鶴所持の白天目四碗の一つである。この白天目の形状は、碗形の和天目である。釉調は、淡緑色である。内面底部には釉溜と、ピンホール状の凹みの痕跡があり、釉層表面から釉層界面まで貫入が入る。又、釉層中には多数の気泡があり、内面中央部の気泡には破れているものもある。素地の露胎部分は、赤褐色である。

この白天目の釉調と似た天目が、平成七年に多治見市小名田窯下窯跡で発掘されたのを機会にそれ以降十六年間、白天目の再現を試みてきた。白天目の土と釉については、胎土は白く、灰釉であると確信している。この白天目の再現を求めて実験を繰り返すなかで、各研究機関の支援をいただきながら次のようなところまで到達した。

胎土は、アルミナ分の多い粗めの土である。釉は、鉄の含有量の少ない灰と硫酸分の多い粘土と少量の長石質分である。釉と素地の接点にはカリの濃化がみられ、焼結することで、素地の白さが引き立つことになる。釉中の気

泡が大きいのは、石灰分の作用によると考えられる。再現を試みて十二年間使用した白天目を、電子顕微鏡による元素分析にかけた結果、露胎の赤褐色は有機物であることが判明したことから、経年の使用から生まれた色であったと考えている。

前田家伝来であった白天目も、これまでの再現実験から灰釉が溶融するまでの過程でみられる釉調と似ているので、灰釉でると考えている。つまり、前田家伝来であった白天目は、徳川美術館所蔵の白天目とは、焼成の違いによる釉調の発色の違いだと推察している。今後この再現を目指していきたい。

近畿例会

(平成二十四年十一月十七日)

「酒井宗雅ののこしたもの」

影山純夫

姫路藩主であった酒井宗雅は、石州流の茶を学び『逾好日記』という茶会記を残したことで知られている。

彼は大名の当然の教養として、学問を修めただけでなく、能、絵画、茶などを学んだ。絵画は、親しくしていた宋紫石に学んで長崎派の影響の強い写実的な絵画を描き始め、つ

「茶会記にみる酒井宗雅の茶」

橋倫子

本発表は、茶道資料館における平成二四年秋季特別展「茶会記にみる茶道具―姫路藩主酒井宗雅の茶と交遊」に関連して、酒井宗雅(本名忠以、一七五五―一七九〇)の日記から、新たに確認した内容を紹介することを目的としている。

宗雅は、三十六年という短い生涯の中で、『玄武日記』『逾好日記』という二つの日記を残した。『玄武日記』は二十二歳より約十五年にわたる日次記、『逾好日記』は天明七年(一七八七)から約三年間の茶会記である。先行研究では、主に『逾好日記』に基づいて茶人としての動向や所蔵する茶道具の分析が行われてきた。

しかし、『玄武日記』を分析してみると、生涯で最も多く茶会を行った時期は『逾好日記』が記される前の天明四年(宗雅三十歳)で、自会・他会合わせて年間一二〇回にも及ぶ記載が確認できた。宗雅は親戚関係にあった大給松平乗完や池田治政との交流の中で、茶の湯に興味を持ったと思われる、天明二年頃から他の大名達との茶会も含め記載数が徐々に増えていく。宗雅の師・松平不味の名前が登場し始めるのも天明四年頃からである。一方、



東京例会

四月二十日(土)(会場:東洋英和女学院大

「喫茶往来」の善本について」高橋 忠彦

「南都宗具の連歌と茶湯」木島 蓉子

五月二十五日(土)(会場未定)

「千利休の生涯」中村修也

「張源茶録」と日本―藤村庸軒と上田秋成

七月十三日(土)(会場:東洋英和女学院大

「朝鮮半島に視る茶室(草庵)の原風景」

「外から見た茶の湯」

田中 秀隆

岩間真知子

井上 慶雪

静岡例会

女性研究者による「茶文化研究発表会」
(茶の湯文化学会など共催)

開催日時：五月四日(土)

十時半～十六時十分

会場：静岡市・あざれあ(静岡県男女
共同参画センター)

演者・題目

岩間真知子「神農と茶」

木村 栄美「日本喫茶文化における陸羽・

盧同とその展開」

滝口 明子「ボンテカー」茶論」の文化

史的意義」

谷村 玲子「江戸時代の女性の茶の湯」

橋本 素子「室町時代政治儀礼における

茶の作法」

吉野 亜湖「草双紙に描かれた江戸時代

の茶」

参加費：三,〇〇〇円(論文集代を含む)

参加は男女を問わない

参加申し込み：左記あてに、郵便番号、住

所、氏名、電話番号を明記のうえ、FAXで。

小泊重洋

TEL/FAX〇五三七―二四―四八六四

二十一名の女性研究者執筆による「茶文化
研究論文集」(予価二,〇〇〇円)は、上記発
表会以降残部をお分けします。問い合わせは、
小泊重洋まで。

東海例会

五月十一日(土)

(会場：愛知県陶磁資料館
午後二時～)

「曜変の再現研究と瀬戸の伝統」長江惣吉

講演終了後「型物香合番付の世界」展示

見学

六月二十九日(土)

(会場：名古屋文化短期
大学 午後二時～)

「点前の変遷」

熊倉 功夫

高知例会

六月二十三日(日)

(会場：高知県立文学館
慶雲庵茶室 十時～十二時)

「茶の湯文化学会二十五年度大会の研究発
表をテーマとしたシンポジウム」

永吉 溪滋

軽食茶事

六月二十三日(日)

席主 四名 (十二時～十六時)

場所 高知県立文学館 慶雲庵茶室

会費 無料

※ 参会希望者は予め連絡をして下さい

新刊紹介

* 『金森宗和』 谷 晃著 宮帯出版社

(定価三,二〇〇円+税)

金森宗和の茶の湯と人物像に迫り、資料

も充実した金森宗和研究の決定版。

* 『和様の美―かな古筆名跡便覧』 福井淳哉

著 淡交社 (定価一,八〇〇円+税)

かな古筆の資料性と芸術性について理解

を深めることを目的とした書。

* 『近現代における茶の湯家元の研究』 廣田

吉崇著 慧文社 (定価四,〇〇〇円+税)

近現代における家元の変遷を纏めた書。